

鼠坂

森鷗外

青空文庫

小日向こびなたから音羽おとわへ降りる鼠坂ねずみざかと云う坂がある。鼠でなくては上がり降りが出来ないと云う意味で附けた名だそう。台町の方から坂の上までは人力車が通うが、左側に近ちか頃刈り込んだ事のなきような生垣を見て右側に広い邸跡やしきあとを大きい松が一本我物顔ごうばいに占めてゐる赤土の地盤を見ながら、ここからが坂だと思ふ辺まで来ると、突然勾配こうばいの強い、狭い、曲りくねつた小道になる。人力車に乗つて降りられないのは勿論もちろん、空車からぐるまにして挽ひかせて降りることも出来ない。車を降りて徒歩で降りることさえ、雨上あまあがりなんぞにはむずかしい。鼠坂の名、真まことに虚むなしからずである。

その松の木の生えている明屋敷あきやしきが久しく子供の遊場になつていたところが、去年の暮からそこへ大きい材木や、御蔭石みかげいしを運びはじめた。音羽の通まで牛車で運んで来て、鼠坂ねずみざかの傍そばへ足場を掛けたり、汽船に荷物を載せるCrane《クレエヌ》と云うものに似た器械を据え附けたりして、吊り上げるのである。職人が大勢はい這入る。大工は木を削る。石屋は石を切る。二箇月立つか立たないうちに、和洋折衷とか云うような、二階家が建築せられる。黒塗の高塀めくが繞らされる。とうとう立派な邸宅が出来上がった。

近所の人は驚いている。材木が運び始められる頃から、誰だれが建築をするのだらうと云つ

て、ひどく気にして問い合せると、深淵ふかぶちさんだと云う。深淵と云う人は大きい官員にはない。実業家にもまだ聞かない。どんな身の上の人だろうと疑っている。そのうち誰やらがどこからか聞き出して来て、あれは戦争の時満洲で金を儲もつけた人だそうだと云う。それで物珍らしがる人達が安心した。

建築の出来上がった時、高塀と同じ黒塗にした門を見ると、なるほど深淵と云う、俗な隷書で書いた陶器の札が、電話番号の札と並べて掛けてある。いかにも立派な邸ではあるが、なんとなく様式離れのした、趣味の無い、そして陰気な構造のように感ぜられる。番町の阿久沢とか云う家に似ている。一步を進めて言えば、古風な人には、西遊記の怪物の住みそうな家とも見え、現代的な人には、マアテルリンクの戯曲あそびにありそうな家とも思われるだろう。

二月十七日の晩であった。奥の八畳の座敷に、二人の客があつて、酒酣たけなわになっている。座敷は極めて殺風景に出来ていて、床の間にはいかがわしい文晷ぶんちゆうの大幅たいふくが掛けてある。肥満した、赤ら顔の、八字髭ひげの濃い主人を始として、客の傍そばにも一々毒々しい緑色の切れを張った脇息きょうそくが置いてある。杯盤の世話を焼いているのは、色の蒼あおい、髪あはの薄い、目が好く働いて、しかも不愛相な年増としまで、これが主人の女房らしい。座敷から人物まで、

総て新開地の料理店で見るような光景を呈している。

「なんにしろ、大勢行つていたのだが、本当に財産を拵えた人は、晨星寥々さ。戦争が始まつてからは丸一年になる。旅順は落ちると云う時期に、身上の有るだけを酒にして、漁師仲間を大連へ送る舟の底積にして乗り出すと云うのは、着眼が好かつたよ。肝心の漁師の宰領は、為事は当つたが、金は大して儲けなかつたのに、内では酒なら幾らでも売れると云う所へ持ち込んだのだから、旨く行つたのだ。」こう云つた一人の客は大ぶ酒が利いて、話の途中で、折々舌の運転が悪くなつてゐる。渡紙のような顔に、胡麻塩鬚が中伸びに伸びている。支那語の通訳をしていた男である。

「度胸だね」と今一人の客が合槌を打つた。「鞍山站まで酒を運んだちゃん車の主を縛り上げて、道で拾つた針金を懐に振じ込んで、軍用電信を切つた嫌疑者にして、正直な憲兵を騙して引き渡してしまふなんと云う為組は、外のものには出来ないよ。」こう云つたのは濃紺のジャケツの下にはでなチョッキを着た、色の白い新聞記者である。

この時小綺麗な顔をした、田舎出らしい女中が、爛を附けた銚子を持って来て、障子を開けて出すと主人が女房に目食わせをした。女房は銚子を忙しげに受け取つて、女中に「用があればベルを鳴らすよ、ちりんちりんを鳴らすよ、あつちへ行つてお出」と云つて、

障子を締めた。

新聞記者は詞ことばを続ついだ。「それは好いいが、先生自分で鞭むちを持って、ひゅあひゅあしよあしよあとかなんとか云つて、ぬかるみ道を前進しようとしたところが、騾らば馬ばやら、驢ろば馬ばやら、ちつぽけな牛うしやらが、ちつとも言うことを聞かないで、綱なわがこんがらかつて、高こう梁りやうの切株きりくだらけの畑はたけ中に立往生たちおしをしたのは、滑こつ稽けいだつたね。」記者は主人の顔をじろりと見た。

主人は苦笑をして、酒をちびりちびり飲んでゐる。

通訳あがりの男は、何か思い出して舌した舐なめずりをした。「お蔭で我々が久し振に大牢たいらうの味あじわいに有り附あいたのだ。酒は幾らでも飲のませてくれたし、あの時位僕は愉快えんげきだった事は無いよ。なんにしろ、兵站へいたんにはあんまり御馳走ごちそうのあつたことはないからなあ。」

主人は短い笑声を漏らした。「君は酒と肉さえあれば満足しているのだから、風流だね。」

「無論さ。大杯の酒に大塊の肉があれば、能事のうじ畢おわるね。これからまた遼陽りやうようへ帰つて、会社のお役人を遣やらなくてはならない。実はそんな事はよして南清なんしんの方へ行きたいのだが、人生意の如くならずだ。」

「君は無邪気だよ。あの驢馬を貰った時の、君の喜びようと云ったらなかつたね。僕はそう思ったよ。君だの、あの騾馬を手に入れて喜んで司令官の爺いさんなんぞは、仙人だと思つたよ。己は騎兵科で、こんな服を着て徒歩をするのはつらかつたが、これがあれば、もうてくてく歩きはしなくても好いと云つて、ころころしていた司令官も、随分好人物だつたね。あれから君は驢馬をどうしたね。」記者が通訳あがりにも問うたのである。

「なに。十里河まで行くと、兵站部で取り上げられてしまった。」
記者は主人の顔をちよいと見て、狡猾げに笑つた。

主人は記者の顔を、同じような目附で見返した。「そこへ行くと、君は罪が深い。酒と肉では満足しないのだから。」

「うん。大した違いはないが、僕は今一つの肉を要求する。金も悪くはないが、その今一つの肉を得る手段に過ぎない。金その物に興味を持つてゐる君とは違う。しかし友達には、君のような人があるのが好い。」

主人は持前の苦笑をした。「今一つの肉は好いが、営口に来て酔つた晩に話した、あの事件は凄^{すこ}いぜ。」こう云つて、女房の方をちよいと見た。

上^{かみ}さんは薄^{くちびる}い唇の間から、黄ばんだ歯を出して微笑^{ほほえ}んだ。「本当に小川さんは、優しい

顔はしていても悪党だわねえ。」小川と云うのは記者の名である。

小川は急所を突かれたとでも云うような様子で、今まで元気の好かったのに似ず、しよげ返つて、饌せんの上の杯を手に取つたのさえ、てれ隠しではないかと思われた。

「あら。それはもう冷えているわ。熱いのになさいよ。」上さんは横から小川の顔を覗のぞくようにしてこう云つて、女中の置いて行つた銚子を取り上げた。

小川は冷えた酒を汗しるわん椀の中へ明けて、上さんの注ぐ酒を受けた。

酒を注ぎながら、上さんは甘つたるい調子で云つた、「でも営口で内に置いていた、あの子には、小川さんも慍かなわなかつたわね。」

「名古屋ものには小川君にも負けない奴やつがいるよ。」主人が傍そばから口を挟んだ。

やはり小川の顔を横から覗くようにして、上さんが云つた。「なかなか別品だつたわねえ。それに肌が好くつて。」

この時通訳あがりが突然大声をして云つた。「その凄い話と云うのを、僕は聞きたいなあ。」

「よせ」と、小川は鋭く通訳あがりを睨にらんだ。主人はどつしりした体で、胡坐あぐらを搔かいて、ちびりちびり酒を飲みながら、小川の表情を、睫毛まつげの動くのをも見遁みがさないように見て

いる。そのくせ顔は通訳あがりの方へ向けていて、笑談らしい、軽い調子で話し出した。「平山君はあの話はまだしらないのかい。まあどうせ泊ると極めて以上の、ゆつくり話すでしょう。なんでも黒溝台の戦争の済んだ跡で、奉天攻撃はまだ始まらなかった頃だったそうさ。なんとか窩棚と云う村に、小川君は宿舎を割り当てられていたのだ。小さい村で、人民は大抵避難してしまつて、明家の沢山出来ている所なのだね。小川君は隣の家も明家だと思つていたところが、ある晩便所に行つて用を足している時、その明家の中で何か物音がすると云うのだ。」通訳あがりには平山と云う男である。

小川は迷惑だが、もうこうなれば為方がないので、諦念めて話させると云う様子で、上さんの注ぐ酒を飲んでゐる。

主人は話し続けた。「便所は例の通り氷つている土を少しばかり掘り上げて、板が渡してあるのだね。そいつに跨がつて、尻の寒いのを我慢して、用を足しながら、小川君が耳を澄まして聞いていると、その物音が色々に変化して聞える。どうも鼠やなんぞではないらしい。狗でもないらしい。小川君は好奇心が起つて溜まらなくなった。その家は表からは開けひろげたようになって見えている。炕の縁にしてある材木はどこかへ無くなつて、築き上げた土が暴露している。その奥は土地で磚と云つている煉瓦のようなものが一ぱい

積み上げてある。どうしても奥の壁に沿うて積み上げてあるとしか思われぬ。小川君は物音の性質を聞き定めようとすると同時に、その場所を聞き定めようとして努力したそうだ。自分の跨がっている坑あなの直前は背丈位の石垣になっていて、隣の家の横側がその石垣と密接している。物音はその一番奥の所でしている。表から磚たんの積んだのが見えている辺である。これだけの事を考えて、小川君はどうとう探検に出掛ける決心をしたそうだ。無論便所に行くにだつて、毛皮の大外套おおがいとうを着たままで行く。まくった尻を卸してしまえば、寒くはない。丁度便所の坑てまの傍に、実をむしり残した向日葵ひまわりの茎を二三本縛り寄せたのを、一本の棒に結び附けてある。その棒が石垣に倒れ掛かっている。それに手を掛けて、小川君は重い外套を着たままで、造做ぞうさもなく石垣の上に乗つて、向側を見卸したそうだ。空は青く澄んで、星がきらきらしている。そこら一面に雪が積つて氷っている。夜の二時頃でもあろうが、明るい事は明るいのだね。」

小川はつぶやくように口を挟んだ。「人の出たらめを饒舌しゃべつたのを、好くそんなに覚えているものだ。」「好いから黙つて聞いてい給えたま。石垣の向側はやはり磚が積んであつて降りるには足場が好い。降りて家の背後うしろへ廻つて見ると、そこは当り前の壁ではない。窓を締めて、外から磚で塞いだものと見える。暫くしばらその外に立つて聞いてみると、物音はじ

き窓の内ではしている。家の構造から考えて見ると、どうしても炕かんの上なのだ。表から見える、土の暴露している炕は、鉤かぎなりに曲った炕の半分で、跡の半分は積み上げた磚で隠れているものと思われる。物音のするのは、どうしてもその跡の半分の炕の上なのだ。こうなると、小川君はどうもこの窓の内を見なくては気が済まない。そこで磚を除のけて、突き上げになっている障子を内へ押せば好いわけだ。ところがその磚がひどくぞんざいに、疎まばらに積んであつて、十ばかりも卸してしまえば、窓が開きそうだ。小川君は磚を卸し始めた。その時物音がびつたりと息やんだそうだ。」

小川は諦あきら念めて飲んでいる。平山は次第に熱心に傾聴している。上さんは油断なく酒を三人の杯に注いで廻る。

「小川君は磚を一つ一つ卸しながら考えたと言うのだね。どうもこれは塞ふさぎ切きりに塞ふさいだものではない。出入口にしているらしい。しかし中に人が這入っているとすると、外から磚が積んであるのが不思議だ。兎とに角かく拳けん銃じゆうが寢床に置いてあつたのを、持って来れば好かつたと思つたが、好奇心がそれを取りに帰る程の余裕を与えないし、それを取りに帰つたら、一しよにいる人が目を醒さますだろうと思つて諦あきら念めたそうだ。磚は造做もなく除けてしまった。窓へ手を掛けて押すとなんの抗抵もなく開く。その時がさがさと云う音がし

たそうだ。小川君がそつと中を覗いて見ると、粟稗あわがらが一ぱいに散らばっている。それが窓に障さわつて、がさがさ云つたのだね。それは好いが、そこらに甑かめのような物やら、籠かごのような物やら置いてあつて、その奥に粟稗に半分埋うずまつて、人がいる。慥たしかに人だ。土人の着る浅葱色あさぎいろの外套すそのような服で、裾すその所がひっくり返っているのを見ると、羊の毛皮が裏に附けてある。窓の方へ背中を向けて頭を粟稗に埋めるようにしているが、その背中はぶるぶる慄ふるえていると云うのだね。」

小川は杯を取り上げたり、置いたりして不安らしい様子をしている。平山はますます熱心に聞いている。

主人はわざと間を置いて、二人を等分に見て話し続けた。

「ところがその人間の頭が辮べんつう子こでない。女なのだ。それが分かつた時、小川君はそれまで交つていた危険と云う念が全く無くなって、好奇心が純粹の好奇心になったそうさ。これはさもありそうな事だね。爾にいと声こゑに力を入れて呼んで見たが、ただ慄ふるえているばかりだ。小川君は炕かどの上へ飛び上がった。女の肩に手を掛けて、引き起して、窓の方へ向けて見ると、まだ二十はたちにならない位な、すばらしい別品べっぴんだつたと云うのだ。」

主人はまた間を置いて二人を見較べた。そしてゆっくり酒を一杯飲んだ。「これから先

は端折はしよつて話すよ。これまでのような珍らしい話とは違って、いつ誰がどこで遣つても同じ事だからね。一体支那人はいざとなると、覚悟が好い。首を斬きられる時なぞも、尋常に斬られる。女は尋常に服従したそうだ。無論小川君の好嫖はおびや致やおちな所も、女の諦念あきらめを容易ならしめたには相違ないさ。そこで女の服従したのは好いが、小川君は自分の顔を見覚えられたのがこわくなつたのだね。「ここまで話して、主人は小川の顔をちよつと見た。赤かつた顔が蒼あおくなつている。

「もうよし給え」と云つた小川の声は、小さく、異様に空洞うつろに響いた。

「うん。よすよすよ。もうおしまいになつたじゃないか。なんでもその女には折々土人が食物をこつそり窓から運んでいたのだ。女はそれを夜なかに食つたり、甑かめの中へ便を足したりすることになつていたので、小川君が聞き附けたのだね。顔が綺麗だから、兵隊に見せまいと思つて、隠して置いたのだらう。羊の毛皮を二枚着ていたそうだが、それで粟稈あはらの中に潜つていたにしても、炕かんは焚たかれなから、随分寒かつただらうね。支那人は辛抱強いことは無類だよ。兎に角その女はそれきり粟稈の中から起きずにしまつたそうだ。」

主人は最後の一句を、特別にゆつくり言つた。

違棚の上でしつつかい金の装飾をした置時計がちいんと一つ鳴つた。

「もう一時だ。寝ようかな。」こう云つたのは、平山であった。

主客は暫くぐずぐずしていたが、それからはどうした事か、話が榮えない。とうとう一同寝ると云うことになって、客を二階へ案内させるために、上さんが女中を呼んだ。

一同が立ち上がる時、小川の足元は大ぶ怪しかった。

主人が小川に言った。「さっきの話は旧暦の除夜だったと君は云つたから、丁度今日が七回忌だ。」

小川は黙つて主人の顔を見た。そして女中の跡に附いて、平山と並んで梯子を登つた。

二階は西洋まがいの構造になつていて、小さい部屋が幾つも並んでいる。大勢の客を留める計画をして建てた家と見える。廊下には暗い電燈が附いている。女中が平山に、「あなたはこちらで」と一つの戸を指さした。

戸の撮みに手を掛けて、「さようなら」と云つた平山の声が小川にはひどく不愛相に聞えた。

女中はずんずん先へ立つて行く。

「まだ先かい」と小川が云つた。

「ええ。あちらの方に煖炉が焚いてございます。」こう云つて、女中は廊下の行き留まり

の戸まで連れて行つた。

小川は戸を開けて這入つた。瓦斯煖炉が焚いて、電燈が附けてある。本当の西洋間ではない。小川は国で這入つていた中学の寄宿舎のようだと思つた。壁に沿うて棚を吊つたように寢床が出来ている。その下は押入れになっている。煖炉があるのに、枕二元に真鍮の火鉢を置いて、湯沸かしが掛けてある。その傍に九谷焼の煎茶道具が置いてある。小川は吭が乾くので、急須に一ぱい湯をさして、茶は出ても出なくても好いと思つて、直ぐに茶碗に注いで、一口にぐつと呑んだ。そして着ていたジャケットも脱がずに、行きなかり布団の中に這入つた。

横になつてから、頭の心が痛むのに気が附いた。「ああ、酒が変に利いた。誰だつたか、丸く酔わないで三角に酔うと云つたが、己は三角に酔つたようだ。それに深淵奴があんな話をしやがるものだから、不愉快になつてしまった。あいつ奴、妙な客間を拵えやがったなあ。あいつの事だから、賭場でも始めるのじやあるまいか。畜生。布団は軟かで好いが、厭な寢床だなあ。炕のようだ。そうだ。丸で炕だ。ああ。厭だ。」こんな事を思っているうちに、酔と疲れとが次第に意識を昏ましてしまった。

小川はふいと目を醒ました。電燈が消えている。しかし部屋の中は薄明りがさしている。

窓からさしているかと思つて、窓を見れば、窓は真つ暗だ。「瓦斯煖炉の明りかな」と思つて見ると、なるほど、罍土はんどの管くだが五本並んで、下の端だけ樺色かばいろに燃えている。しかしその火の光は煖炉の前の半畳敷程の床を黄いろに照しているだけである。それと室内の青白いような薄明りとは違うらしい。小川は兎に角電燈を附けようと思つて、体を半分起した。その時正面の壁に意外な物がはつきり見えた。それはこわい物でもなんでもないが、それが見えると同時に、小川は全身に水を浴せられたように、ぞつとした。見えたのは紅べ唐紙にとうしで、それに「立春大吉」と書いてある。その吉の字が半分裂けて、ぶらりと下がっている。それを見てからは、小川は暗示を受けたように目をその壁から放すことが出来な
い。「や。あの裂けた紅唐紙の切れのぶら下っている下は、一面の粟あわがら稗だ。その上に長い髪をうねらせて、浅葱色あさぎいろの着物の前が開いて、鼠色によごれた肌着しむが皺しわくちやになつて、あいつが仰向けに寝ていやがる。顎あごだけ見えて顔は見えない。どうかして顔が見たいものだ。あ。下したくちびる唇ちびるが見える。右の口角から血が糸のように一筋流れている。」

小川はきやつと声を立てて、半分起した体を背後うしろへ倒した。

翌朝深淵の家へは医者いしゃが来たり、警部や巡查さくさが来たりして、非常に雑ざつした。夕方になつて、布団かぶを被かせた吊台つりだいが昇かき出された。

近所の人がどうしたのだろうと囁き合^{ささや}ったが、吊台の中の人は誰だか分からなかった。

「いずれ号外が出ましよう」などと云うものもあつたが、号外は出なかつた。

その次の日の新聞を、近所の人は待ち兼ねて見た。記事は同じ文章で諸新聞に出ていた。多分どの通信社かの手で廻したのだろう。しかし平凡極まる記事なので、読んで失望しいものはなかつた。

「小石川区小日向^{こびなただいまち}台町何丁目何番地に新築落成して横浜市より引き移りし株式業深淵某氏宅にては、二月十七日の晩に新宅祝として、友人を招き、宴会を催し、深更に及びし為^ため、一二人宿泊することとなりたるに、其^{その}一名にて主人の親友なる、芝区南佐久間町何丁目何番地住何新聞記者小川某氏其夜^{のういっけつしよう}脳溢血症にて死亡せりと云ふ。新宅祝の宴會に死亡者を出したるは、深淵氏の為め、氣の毒なりしと、近所にて噂^{うわさ}し合へり。」

(明治四十五年四月)

青空文庫情報

底本：「灰燼 かのように 森鷗外全集③」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年8月24日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～9月

初出：「中央公論」

1912（明治45）年4月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2006年12月30日作成

2011年10月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鼠坂 森鷗外

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>